

2007年9月17日 クラブカップリレー (長野県駒ヶ根高原)

熱烈なクラブカップのファンであることを自他ともに認める菅原氏が、クラブカップに対してひとこと

リレーの醍醐味

長野県協会の木村さん曰く、『今回のクラブカップで最もよかったと思えたのは 16:10 のフィニッシュ閉鎖を待たずして、全チームがフィニッシュしたことです。こんな素晴らしいクラブカップは私の記憶にはありません。』

私もこれがすごく大切なことだと思います。リレーの醍醐味はスピーディーな展開です。ツボリあいになるようなレースはリレーイベントとしては失敗だと思います。コースは簡単すぎるぐらいがいいのです。それを勘違いして(主催者の自己満足で)ひねりすぎてしまうとおかしなことになってきます。世界選手権のリレーならともかく、誰でも参加できる CC7 ではこのことを強く意識していくべきだと思います。

その点、今年の CC7 は実に良くコン

トロールされていたと思います。ツボることなく気持ち良くレースを終えられた人が例年よりはるかに多かったと思います。これは顧客満足度の向上、翌年の大会発展にもつながるのではないのでしょうか。

今年の CC7 の上位はそこまで3時間も競ってきて、6 走終了時点で6チームが1分半の中にいました。そして、アンカーのフィニッシュでも4チームが45秒の中にいるという大激戦でした。4時間競ってきて45秒ですよ! 「競い合い」「勝負」と呼ぶにふさわしい結果ではないでしょうか。

今後も素晴らしいクラブカップ

CC7 も 15 回目を迎え、いろいろな意味で曲がり角に来ていると思います。

主宰者の健康問題も気がかりですし、マーケットの縮小も気がかりです。来年の開催は白紙、という衝撃的な発言もありました(その後、開催されることが明らかにりましたが)。

ただ、ここまでイベントが育ってきた以上、CC7 は単なる大会ではなく「公器」「OL 界の財産」として捉えるべきで

はないでしょうか。きちんと開催していくことに一種の責任が生じていると考えていただければと思います(歴史ある一定以上の規模の大会は多かれ少なかれこの側面があると思います。うちの JC 大会を含め)。

6月に、「今年はトレイル0区間を設定する」という情報が流れ、大会掲示板で論議が巻き起こりました。というか大多数は絶対反対の意見でした。

それはそうです。フット0の世界に別の世界を持ち込もうというのですから。結局その案は撤回されましたが、一時はどうなることかと。これは公器としての自覚に欠けた行動と言われても仕方ないのではないのでしょうか。

もし「新しいこと」やりたいなら、そういったイベントをゼロから作るべきだと思います。ここまで育った CC7 を人質に取るようなことは控えていただきたいです。

日本 OL 界全体に元気がない今、CC7 にはマーケットを盛り上げて欲しいと思います。マーケットを盛り上げるには、「参加者が望む大会」を提供することが一番大切だと私は思います(「やりたい大会」ではなく「喜んでもらえる大会」が求められていると思います)。

再び木村さんのコトバ。『なかなか準備は大変なところがありました。皆さんがオリエンテーリングやマウンテンマラソンを楽しむ姿が、運営者にとって最大の楽しみでもありました。』

これも大切なことですね。参加者が楽しく競技に参加し笑顔で会場を後にする……これが運営者のモチベーションにつながるわけです。参加者も積極的に感想をフィードバックして大会と一緒に育てていく姿勢がマーケットの成長には不可欠だと思います。

2004 年以來の優勝、7 度目の優勝。5 チームすべての完走。でもこれに満足せず、来年に向けて準備を始めたいと思います。

運営の皆さん、ありがとうございました。来年も素晴らしい大会が開かれますように! —ファンとして。

(菅原 琢)



優勝した多摩 OL-A チームのメンバー

円井基史(7 走)、多田宗弘(6 走)、前田裕太(2 走)、今井直樹(3 走)

平雅夫(5 走)、菅原琢(1 走)、Joerg Vetter(4 走)

多摩 OL はクラブカップだけでなく、ベテランカップも優勝し、参加全 5 チームペナ無し完走を果たした。ランナーとして参加した者以外の多くのサポーターが会場まで足を運んだ。